日本フィル「被災地に音楽を」訪問コンサート　レポート

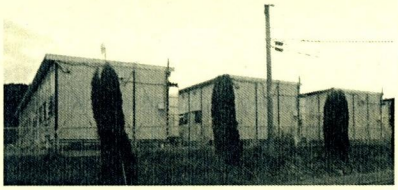
＜第５号＞

2011年10月17日

発行:(財)日本フィルハーモニー交響楽団　〒166－0011 東京都杉並区梅里1-6-1　TEL 03-5378-6311 FAX 03-5378-6161

【宮城県石巻市・仙台市の避難所や福祉施設などで、日本フィルの弦楽四重奏】

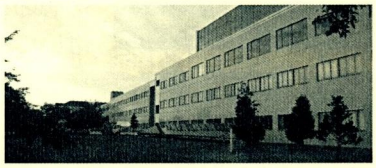
♪体育館から世帯単位で仮設住宅入居へ、しかし新たな課題が･･･（北上中学校で仮設住宅の皆さんへ）

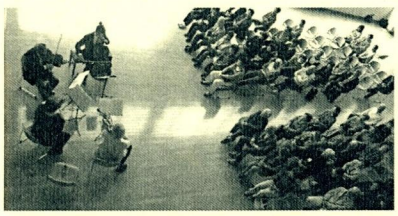


「被災地に音楽を」訪問コンサートで、10 月４日～７日、日本フィル弦楽四重奏のメンバーが宮城県の石巻市と仙台市を訪れました。前日３日に仙台市電力ホールで、また翌４日の昼間に東松島市鳴瀬第一中学校と、２つのチャリティコンサート(主催＝フコク生命)を終えての訪問でした。石巻市は全人口約 16 万人の内、約４千人が亡くなったり行方不明だったりと、被災地域の自治体単位では一番の犠牲者数となりました。４日は石巻市立北上中学校で隣接の仮設住宅の皆さんに聴いていただきました。高台にある学校から見降ろす更地は、津波で建物が流され基礎さえ無くなってしまっています。一軒残った家も１階の壁が突き抜けており、津波の勢いの凄まじさを今に伝えています。私たちを迎えてくれた北上中の畠山校長は「この北上地区でも、まだ７０～８０人の行方不明者がいます。役場の職員は殆どが犠牲になりました。この津波で生き残った人も、その多くが家や家族や仕事を失いました。ボランティアでなくてもいいから、街のこの異常な状況を全国の人に見に来て欲しい」とおっしゃっていました。避難所から 40 人あまりの方が集まり、夜７時からコンサートは始まりました。メンバーはヴァイオリン：松本克巳・加藤祐一、ヴィオラ：新井豊治、チェロ：久保公人。

「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」、「荒城の月」、「見上げてごらん夜の星を」、ドヴォルザーク「アメリカ」等を演奏し、大きな拍手をいただきました。初めて聴く曲でも一音一音かみ締めるように、何度もうなずく姿が印象的でした。アンコールにタンゴの「エルチョクロ」と「星に願いを」。更なる拍手に応えての「青い山脈」に皆さん大喜び。手拍子と大きな歌声が、体育館に響き渡りました。「この体育館には、震災直後は約 300 人が避難、仮設住宅完成で全員が移り、現在ではプライバシーは保たれるようになりました。しかし家族を失い一戸に１～２人で住む方も多く、孤独感や寂寥感も積もり、どうやって相互のコミュニティーを維持するかが課題です。被災地は冬の寒さ対策と心のケアへと、その課題がシフトしてきています」との校長先生の言葉が、耳から離れません。

♪近くに仮設住宅のほか瓦礫の集積場も。大学構内で癒しの調べ･･（石巻専修大学で仮設住宅の皆さんへ）



（石巻専修大学）

５日は、大規模な仮設住宅が近接する石巻専修大学で、大学生含め仮設住宅にお住まいの約 60 人の方に聴いて頂きました。大学には「災害ボランティアセンター」も設置されています。周辺には沿岸部から運ばれた大量の瓦礫や、被災した車の集積場があり、無造作に積まれた車の山に思わず息を呑みました。広大な敷地に校舎が点在する、ゆったりとした大学で私達を迎えてくださったのは、作曲家でもある近藤裕子教授。かつては日本フィル定期会員とのことでメンバーともすぐに意気投合。演奏は授業の合間の昼休みに、学生ホールで行われました。「愛の喜び」「ジュピター」等、11 曲を演奏し、「震災後から半年が経ち、今までは音楽を聴く気になれなかったけれど、ようやく音楽を聴ける生活に戻れた気がする」、「一時間も演奏してくれるオーケストラ団体は今までいなかった」、「こんなに素晴らしい演奏会を独り占めできるなんて贅沢な時間でした」と口々に喜びの感想をいただきました。「その気になれば、いつでも音楽に触れることができた日常に、一日も早く戻って欲しい」そう思わずにはいられませんでした。